

Eureka VI

六年制通信 No. 34 平成31年2月23日(土)号

予習か復習か

予習と復習ではどちらが大切かという質問は、非常によく受けます。どちらも大切ですと答えれば、それはそうですよねと物分かりの良い質問者は納得してくれますが、私は8対2から9対1くらいで予習の方が重要だと考えています。ただ、これは学習段階やその内容、あるいは教科によって異なります。初見で理解することが求められる授業においては、予習はしてはいけません。予習に力を入れるべきだというのは私の個人的な経験、主に大学での経験から言っていることです。

君たちにとって予習というのは、授業を受ける準備のことですが、準備と言え以前紹介したイチロー選手の言葉を思い出しますね。「準備という言葉は言い訳の材料となりうるものを排除していくことだ」と「しっかりと準備もしていないのに目標を語る資格はない」です。考えてみればスポーツ選手の場合、試合が本番なわけですから、それに至る時間はほとんど「予習」と考えていいでしょう。ですから準備が大切だというのはプロなら至極当然のことですよね。君たちにとっては、社会に出て何らかのプロとして活躍したければ準備、すなわち予習の癖を今のうちにつけておきなさいという教訓ととらえておく、ということでもいいでしょう。

とはいえ現実に君たちが日々の授業を受けるのに、十分な時間をかけて予習をすることがそんなに必要かどうか、限られた時間なのだからもっと復習に時間をかけた方が知識が定着するのではないか、とかいろいろ考えるでしょうが、もしそれほど予習をしなくても授業を受けられるとしたら、その理由の一つだけです。その授業がやさしすぎるということです。内容が簡単だという以外に理由はありません。自分のレベルが授業より上だったということもあるでしょうがね。

しかし、難易度の高い授業は予習なしには決して成り立ちません。私が語学畑だからかもしれませんが、下調べはほとんど限りがないくらいで、時間がいくらあっても足りないという経験をしています。私の知り合いで10行の予習に10時間かかったという人がいました。これはレアケースでしょうが、それだけ時間をかけても、十分に調べても(調べたつもりでも)はつきりとはわからない場合があります。そういう箇所がいくつもあつたりします。そして、それらを抱えたまま授業に臨むことになるのですが、そうすると授業中に疑問が解けたとき、ものすごく印象に残るわけですね。その時点で復習の半分は終了しているというのが私の感覚なのです。また、十分な予習は授業中の質問の質を高めます。予習の段階からわからないところをずっと考えてきているのですから、疑問の氷解の程度が深くなるのですね。要するに、予習をしつ

かりしていると復習しながら授業を受けることができ、定着も深まると、端的に言えばそういうことです。

また、予習は「まとめてできる」という利点があります。ですからまとめてしっかりと時間を取ってする方がいいと考えています。短時間で予習をするというのは私には考えられません。これに対して復習は「まとめてしてはいけない」と思います。復習は決して持ち越してはいけません。その場で（その日のうちに）こまめに行うことが大切です。授業には段階があるので、1時限目の授業の終了したところが2時限目のスタート地点になります。1時限目の復習がなければその地点には立てないのですから、復習はその都度すぐに行う習慣をつけて下さいね。そうすれば、中高の授業だとちゃんと理解できるようにプログラムされていますから。

ついでながら、予習復習に明け暮れて、疲れてきたら何か気晴らしが必要になってきますが、この気晴らしについて言うておくことがあります。例えば、勉強に疲れてくると、映画を観るなり寝るなりして疲れをいやすわけですが、これが「気晴らし」になるためには、自分が本質的に勤勉な人間であるという自覚が必要です。自覚だけでなく、普段の行動において勤勉さが見えなければなりません。自分は勤勉であるという自信のある人は、少々寝ていようが遊んでいようが大丈夫ですが、そこがあやしいと気晴らしにはなりません。これは大人になっても同じです。仕事に対して勤勉な人が休日に気晴らしをするから、次の活力につながるのです。

予習復習の習慣は君を勤勉な人間にしてくれると思いますよ。

今週のおすすめ

・倉田正也 『ことわざから科学へ』 (悠々社)

著者は三菱化成工業の研究者。科学の知識を十分に備えた文人が、ことわざや格言を手掛かりとしてエッセイを書いたらこうなる、という本。これだけ豊かで確実な知識があったら楽しいだろうと思います。「矛盾」の故事は皆さんご存知でしょうが、矛も盾も手に持てる大きさと仮定すると、矛は盾を突き通すはずだということを、速度という要因から解説しています。面白い。「匂い松茸味しめじ」では、「人口に膾炙する」の語源、つまり膾（なます）も炙（あぶり肉）もうまいことから来ているとの説を紹介しつつ、論語には「味」という語が一度しか出てこないなど、ほ～おと唸る知識が満載。続いて「味」とはそもそも何かという話になります。「むしろ鶏口となるも牛後となる勿れ」では、様々な化学物質の精製にまつわる話、そこから生まれた副産物の扱い、組織の当事者能力の問題など筆は進み、そしてやはり鶏口がいいとの判断をされている。

筆者は昭和元年の生まれ。あのころの教養人の凄味を存分に味わえる一冊だと思います。好奇心旺盛な方であることは間違いないが、堅苦しい人だろうと勝手に想像していたら「山は木多きをもって貴しとなす」を読んで、ひょっとしたら面白いオジサマだったのかもしれないと思いましたな。この副題は「禿頭居直りの弁」です。

BGMは Rod Steward の *Sailing* でした…。